論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報告番号	博(医歯薬)甲第 787 号	氏名	飛永 修一

学 位 審 査 委 員		
	主　査	中島 正洋
	副　査	李 桃生
	副　査	泉川 公一

論文審査の結果の要旨

１　研究目的の評価

本研究は、難治性かつ進行性である肺気腫の肺機能改善や急性増悪の予防に、肺胞上皮細胞の増殖促進作用を有す keratinocyte growth factor (KGF) の遺伝子導入が治療法として有効か否かを検討するもので、目的は十分に妥当である。

２　研究手法に関する評価

8 週齢雄性マウス porcine pancreas elastase (PPE)気管内投与肺気腫モデルを用いた。KGF 遺伝子発現ベクターを大腿筋に electroporation 法により導入し、肺組織での KGF とその受容体の発現量および局在を免疫組織化学やその他の方法で確認、遺伝子導入後の病理学的変化として肺胞径、肺胞上皮の増殖能と細胞死を、肺機能評価としてサーファクタント発現と血液ガス分圧を解析したもので、研究手法も妥当である。

３　解析・考察の評価

上記手法で解析した結果、大腿筋への KGF 遺伝子導入により肺胞上皮での KGF 発現が亢進し、その前投与が肺気腫モデルの細胞増殖能の亢進と肺胞径の縮小、機能改善に有効であることが判明した。骨格筋への異所性遺伝子導入である本法は投与法も簡便であり、肺気腫の急性増悪抑制に寄与する治療法を提案する結果として評価される。

以上のように本論文は、慢性閉塞性肺疾患の治療研究に貢献するところが大であり、審査委員は全員一致で博士（医学）の学位に値するものと判断した。